

埋もれた婦人運動家⑧ 松永クニ

常磐炭坑の闘士山代吉宗の母



野育ちを原点に

クニが生まれた平というところは、維新のとき薩長軍とたたかった城下町で、落城のとき十七歳の若武者だった彼女の父松永善左衛門は、城へ上る坂道が死人の山になるのを目のあたりに見、自分も血まみれになった人である。母もまた毎日五里ずつ何日も逃げ迷った人である。二人の間には九人の子どもがあったが、善左衛門は平にいては仕事もなく、東京に出て請願巡査などになり、家族を省みるゆとりがなかったから、四番目に生れたクニは父の顔をほとんど見ることもなく育った。彼女は自分たち兄弟と似たような貧しい子ども群と、狐の住む深い木立にかこまれた旧藩の首斬り場の跡や、桜並木や漆のあたりで、竹の子掘りや木の実取りに明け暮れて、

小学校へも行かず芸ことも習わずいつしか十六歳になっていたのだ。十六歳から十八歳の終りまで奉公したのは茂助という紺屋で、彼女はここで機織と裁縫を仕込まれた。この生い立ちが後の闘いの原点になっているとわたしは思う。

敗残の士族のこの零落に引きかえ、採炭事業は日に日に隆盛に赴いていた。クニが嫁ぐことにきめた山代広次郎は、現在の島根県太田市大森町の生である。大森は徳川幕府直轄の銀山のあったところで、広次郎の生家は山方組頭の役職を持っていたが、明治九年に生れ、十五年に父を失った彼は、七歳で生野銀山(岡山県所在)の吉岡という組頭にあずけられ、ここを振り出しに筑豊、足尾、夕張と鉱山を渡り歩いて、明治二十八年福島県石城郡内郷町(現在はいわき市)にあった、町田炭

山代

(作家)

鉱の飯場頭岡本実次郎のもとに、草鞋を脱ぐまでには、腕つぶしと統率力は身につけたが、読み書きは一切ならなかった。しかし当時はこういう人々が現場の実権を握っていたので、彼はたちまち実次郎親分に見込まれ、実次郎の養子となり飯場を与えられた。

クニは記憶のよい人で老いて後も、誰彼なしに自分の体験を語って楽しんでいて、彼女の記憶の最も鮮烈な部分に、坑道開発のさまざまな飯場暮しがある。坑道で水びたしになって働いた坑夫たちが唇を紫にし、鳥肌をたてて震えながら堅坑を上って来たとき、クニは待ちかまえていたようにして、彼らが熱いどじょう汁を吸い、白い飯を腹一杯に頬張って、生きた心地を取り戻せるようにすることを、自分の第一の勤めにしてきたのである。飯のほかに風呂場の経営も担当した。次

第にふえる大部屋の友子(配下の坑夫)のために、せつせと蒲団も縫った。かつて狐の遊ぶ敗残の城跡で男女の性の差もわきまえず潑刺と育った彼女には、一般からは疎外されている飯場者と、一体になって生きることになだかまりはなく、むしろ生きがいを見出していたのである。

明治三十六年四月、町田の堅坑は川底に当り、入水のため廃坑になった。彼女は三歳の長男吉宗を養父岡本実次郎のもとに残して、夫と共に磐城採炭株式会社の小野田坑に飯場を移したが、こういうとき彼女は子と別れることを苦にできなかった。日露戦争の戦勝景気は、狭い小野田へあふれるばかりに押し寄せ、金と命を取りかえに働く坑夫たちは、景気よくバクチを打ち、女郎買いに行き、稼いだ金をすつかり使いはたしてまた堅坑を降りて行く者が多かった。そうした坑夫を二百人近くも配下に従える広次郎は、洋服なども近くの平や湯本では作らず、わざわざ東京に出てフランス人に仕立てさせ、ふだん着のワイシャツも英国製のフランネルで仕立てさせるといふような洒落者になっていた。待合へ行っても金に目をくれぬ豪遊を樂しみ、家にいるときは、帳つけの女房フヨに流行の着物を買っ

てやり、フヨを連れて芝居見物に出かけた。こういうときもクニは泣いたり嫉妬したりはしない。「そっちがやるならこつちもやる」と、クニを大事に扱う今川という若い者と、湯本の劇場へ芝居見物に出かけるようになった。

ある日クニと今川の二人連れは雷雨に会って帰りが遅くなった。広次郎はチャンスとばかり、二人を待ちかまえ、今川を見るなり「きさま夕張で、さんざんおれの世話になりやあがつたくせに、この野郎!!」と、拳をかためて今川の眉間を割った。この瞬間クニの脳裏には、広次郎との間に生れた七歳の吉宗、五歳の町子、三歳の宗徳のために、手を突いてあやまっても、母としてここに止まろうという心は浮ばないのだ。「なんだ! てめえはあんな性悪女とくっついてる癖に、おれの帰りが遅くなって何が悪い。邪魔ならいますぐ出て行ってやる! 青天井と三度の飯ぐらいどこにでもあらあ!!」と、荷物をまとめてさっさと山を出たのだ。

一人だちの道

時は明治四十二年、クニは二十八歳だった。小野田の山を下りた彼女は東京へ出て、

本郷(文京区)弓町にあった英和女学校という、キリスト教財団の経営する学校の寮のまかない婦人になった。七輪四つを同時に使って二十五、六人の生徒の和食と、ミス・カーペンターやミス・ホイットマンなどと呼ぶ婦人教師の洋食を作る忙しい日が続いた。そこで彼女は讃美歌や聖書を聞き覚えた。そうして五年が過ぎたとき、まるで夢のように広次郎の使が来て、長男吉宗が福島県立磐城中学に入学したことを知らせた。三十三歳の彼女は息子に母であることを名乗りたくて、平に帰り、中学校の門前で息子を見つけ、「吉よ!」と近づいたが、三歳で別れて以来会っていない息子に、母の面影が残っているわけはない。彼は走って逃げた。クニはがっかりして再び東京に出て、こんどは八条という華族の家の女中になった。

ここで彼女は須賀川生れと称する弁護士志望の書生と親しくなったが、彼女が妊娠すると書生は、「二人の家庭を持つためには家から財産を分けてもらう必要があるから、田舎へ帰って来る」と八条家を出て、そのまま音信を絶った。彼女は大きな腹をして須賀川を尋ねたが、書生が教えたところは書生とは関係のないところだった。須賀川駅から彼女を

乗せた人力車夫は、男にだまされたことに気づいて狼狽するクニに同情して、彼女を自分の家に連れて帰り、分曉までの生計のために、須賀川遊廓の着物を縫うように世話をしてくれた。車夫の話によると彼は、会津坂下町の紙問屋の入婿だったが、嫁と折り合いが悪く、のべ紙二枚をしょって逃げ出し、車夫となって再起をはかっているということだった。似たような過去から二人は意気投合した。こうして彼女は、彼女を捨てた書生の子を生んだ次には、車夫の子を生んだ。ところが、車夫の子が生まれて間もなく車夫は、ある炎暑の日、長い道を走って帰ると、上り口に例れ、二、三度大きい息をするとそのまま死んで行った。こうしてクニは、戸籍上の私生児を二人かかえて、針を頼りに生きねばならなくなったのであった。

息子との出会い

大正七年は米騒動の起きた年である。全国的な騒起は八月であったが、これより五ヵ月前の三月、小野田の飯場街から十キロのところにあった、大日本炭鉱唐虫坑の坑夫たちは、山米と呼ばれる豚の食うような粗悪米のおしつけにいきどおり、会社事務所や米屋を襲った。憲兵隊が出動して数人が殺され、騒

擾罪で起訴された者は九八名にのぼった。このことは新聞など読むこともない閉鎖的な坑夫長屋をも揺り動かした。吉宗の父広次郎は、唐虫から逃亡した坑夫を幾人か自分の飯場へかくまった。中学五年生、海軍士官への希望を抱く吉宗は、逃亡者たちの口から、騎馬兵が彼らを追いつめ、逃げおくれる者を馬に踏ませ、長剣を振って無惨に切り殺したことを聞いた。この衝撃は彼の士官への希望を一挙にかき消した。

唐虫の暴動から間もなく湯本の町へ、友愛会の会長鈴木文治が演説に来て、「愛と人道」とよって貧富の差をなくし、労働者の立場を向上せしめよ」と叫んだ。吉宗の心に労働者解放の灯がついた。同じころトルストイの礼賛者も来て、「人間の復活」を唱え、人道主義を鼓吹した。彼はここに行動の一步を見出し、夏休みには毎日、坑夫と同じように襦一本の裸になって堅坑を降り、地底の労働の中で人道主義の受売りをした。広次郎に向い「坑夫のピンハネでためた財産は坑夫に返せ」と要求したのもこの夏である。

広次郎は短気で、口より先に拳を振る男で、息子の抗議にも拳で対抗したが、その

秋、氣に入りの芸者一人と読み書きの出来る友子一人を連れて、大和路への旅に出て流行のスペインかぜにかかり、帰って来て二日目には世を去った。会社の役員や仲間の飯場頭たちが寄って相談した結果、鈴木達三郎という広次郎の子分頭に、飯場をあずけて、その権利金で、家族の生活費と吉宗が大学へ行く学資をまかなうことになった。こうして吉宗は大学への道を歩むことになったが、彼の心はすでに飯場解放の道を一途に求めているから、名門校は選ばなかった。大正八年春中学校を卒業した彼は、東京へ出ると当時は無造作に入学できた明治大学に籍を置き、自らの方法で勉強した。

彼が上京した年は、一月には『社会問題研究』、二月には『我等』、四月には『改造』や『解放』が創刊された。吉宗はこのいずれをも購読するようになった。思想界は激流を流れていて、この年九月、ILO労働代表政府選定反対の全国大会が開かれ、革命的な労働者大衆は官選代表を吊旗で送った。一年前湯本に来て、中学生の吉宗に労働者解放の目をさましてくれた鈴木文治が、労働者の吊旗で送られる。この激動の中で彼もたえまなく変化しつつ三年の大学生生活をすごした。大正十

一年、作家有島武郎は父譲りの北海道の農場四百町歩を、小作人に解放して大きな反響を呼んだが、吉宗はこういう解放を自己満足と判断し、自分が父の飯場の権利をつぐことは、「小野田の労働階級が、自らの価値に目ざめる寄りどころを作ることだ」と決意して、この年十一月小野田に帰った。

大学出が飯場頭になったということは、たちまち評判になり、『学士飯場』が吉宗の異名になった。彼の手はじめの仕事は中間搾取の半減であった。飯場頭は入坑させた坑夫の稼ぎ高の六分を会社から直接に手当てとして受けとり、そのうえ稼ぎ高の五分を坑夫一人一人からピンハネするきまりだったが、吉宗は五分のピンハネをやめた。飯場は物品の販売でも利益をあげる仕組みで、月末払いを口実に、米、酒、タバコなど一切に掛値が保証されていたが、吉宗は掛売りもやめた。ソルハシやタガネの焼賃も飯場持ちにした。こうした彼に、生母クニの窮状が伝わった。

吉宗が、生母と意識してはじめて見るクニは、須賀川の遊廓近くの、炭坑の棟制長屋そっくりの、佻しい長屋の軒に、「したてものの」札をさげ、二人の女の子をかかえて暮らしていた。彼は月々三十円送金するようにになっ

た。ところが間もなく「貴殿の送金は、母ごを蟻地獄へ落すだけだ。母ごには監督がいる」という、無名氏の手紙が来た。彼はまたクニを訪問した。クニは妊娠していたが、息子から「誰か相手がいるのか」と聞かれると、「おれは瘦せても枯れても平藩士族の娘だ」と、かつて何の恵みも受けなかった族制を持ち出し、「めんどろな釣銭のいる施し金はいらないよ」というのであった。

いまの私は思う、このせりふは大変な意味を持っている。一揆に立ち上る農民が、鎌であれ秤（機）の道具であれ、石であれ、手あたり次第のものを防衛の武器にしたように、クニは相手がたじろぐような言葉を、思いつくままに吐き出して、自己のプライバシーを防衛したのだ。それはだまされたと泣きごとを並べて、プライバシーを裸にするより、はるかに近代であろうと。

吉宗が三度めにクニの家へ行ったとき、クニは留守で、赤ん坊が眠っていた。留守番の妹に「どこの赤ん坊だい」と聞くと、「うちのだよ」「赤ん坊のお父ちゃん居るのかい」「知らねえ」「どっかからおっちゃん来ねえか?」「踏切番のおっちゃん来るよ」。赤ん坊には名前もまだなかった。このままにして

置いたら生母は、何人の私生児を生むかわからないと息子は思うが、やがて仕立物を抱えて帰ったクニを見ると、それは口に出せなかった。「飯場の方が忙しいので帰って来て手伝ってはくれないか」と頼んだ。クニは「お前が困っているんなら手伝いに帰ってもいいよ」といい、赤ん坊の名は息子につけてもらった。こうしてクニは再び小野田の坑夫街の人になった。

労働会の力アちゃんに成長

吉宗はクニとその三人の娘を、近くに家を借りて住ませたが、自分の飯場には継母フヨが、連れ子二人と広次郎との間に生れた四人、あわせて六人の子を連れていた。継母を意図する彼女は吉宗に平身低頭しているが、陰では内証に、わが子へだけはおいしい物を食べさせている。そうしたことは長屋の話題になっていて、クニの耳へも入る。本来野生的なクニは、丸鬚を振り立てて、かつて自分が主婦として住んだ家に乗りこみ、流しの下の卵の割れ数をかぞえて、フヨの内証をあばき、「この性悪女!」おらの亭主を寝取った淫売女!と大声をあげる。フヨも負けてはいない。「そんなにこの家に未練があるなら、

なんで出て行った！ 父なし子を三人も抱えて、どの顔で戻れたか、恥を知れ!!。二人は互いに丸鬚を引っぱり合って格闘を始める。飯場の者も、近所の女房連も、フヨにつくかクニにつくか、どちらかについて闘志を燃やす。右往左往組もちよるちよるする。吉宗はとうとうノイローゼになり、療養を口実に東京へ逃げ出したが、療養中の彼は考えた。食い物のケンカ、寝取った寝取られたのケンカは、わが家だけのことでない、棟割長屋のとざされた社会では日常茶飯のことだ。これは一飯場頭の間搾取の半減や、掛売りの掛値の廃止ぐらいで改善されはしないと。

山へ帰って来た吉宗は、飯場の広間を解放して、子どもたちを集めて、かぐや姫やインツプ童話にませて、自分の創作童話も話して聞かせ、オルガンを弾いて唱歌もうたわせた。子どもたちはこれを「山代の少年会」と呼んだ。青年には「種蒔く人」「解放」「我等」などを回覧した。青年たちは彼を会長に「小野田青年会」を作った。「小野田婦人会」はそのような動きの中で生れた。これは「炭坑の娘は嫁にもらっても着物一枚縫えない」という不評をぬぐうため、娘たちが休日にも士飯場の広間に集まって、裁縫を習うことか

ら始まった。クニはまにあわせの教師になり、仕立物の腕を活用した。英和女学校のまかない婦時代に覚えた讚美歌をうたったり、聖書の話の受売りもしたが、外人教師に叩きこまれた、「時間を正しく守ること」「きめたことをやりとげること」「衛生に注意すること」などを、娘たちのしつけの基本にしたのであった。

第一次世界大戦と関東大震災後の石炭界の不況は、資本家に経費節約、事業縮小、能率増進などを強行させた。その結果は坑内外の設備は不完全になり、怪我人は絶え間なく、大正十三年には、八月に近くの入山探炭で、十一月には藤原炭坑でも大爆発が起きた。これらの大惨事に対して坑夫の人権を守ろうとすれば、もはや人道主義の枠ではどうにもならなかった。このようとき雑誌『マルクス主義』が創刊され、無産政党準備のため『政治研究会』が創立された。吉宗は『マルクス主義』の読者になり『政治研究会』のメンバーになった。彼は小野田青年会の有志を『政治研究会』へ誘い入れ、落盤やガス爆発の統廃で、目ざめをうながされている附近の鉱山へも組織に出て行った。大正十四年九月、『無産者新聞』が創刊されると吉宗は、

自分の飯場をこの新聞の支局にして、政治研究会のメンバーにくばった。クニは息子たちあることを聞き覚え、「未来は青年と婦人のものである」というようになってきた。

親分や兄分に常に監視されている飯場制度の下に坑夫が、自らの力で自らの組織を作ることには容易ではない。既に大争議を経験している足尾銅山には、坑夫組合があったが、磐城炭鉱や入山探炭では坑夫組合を作ること自体が、会社からならまれることであった。吉宗の周囲に集った常磐の左翼勢力は、大正十五年の段階でも、左翼独自の力で、磐城炭鉱一万人、入山探炭二千四百人、その他中小あわせて二万余のこの地方の坑夫を結集するには、あまりに微力であった。そこで彼らは、総同盟傘下の日本坑夫組合支部結成の中心になって活動した。大正十五年八月、綴の町の劇場を借りて『日本坑夫組合磐城炭鉱支部』の結成大会が開かれた。会場は坑夫で埋まり、二千余名が組織に加入した。続いて入山探炭、好間炭鉱と、次々に支部が結成され、九月『日本坑夫組合常磐地方連合会』を結成したときには、加盟組合員六千名に膨張していた。しかし左翼が支部の中心勢力になり得

たのは吉宗のいる磐炭支部だけであった。

会社側はこれに対抗するため、『磐炭会』を創立し、会長に若松惣太郎を起用して、坑夫組合破壊の先頭に立てた。この人は大正七年、『友愛会』会長鈴木文治が、はじめてこの地に来て、労働者解放を呼びかけたとき、即座に「友愛会」の支部を作って、支部長になった人である。しかもこの人は吉宗の隣接の飯場頭であった。坑内でも長屋でも人々は、「若松さんなら磐炭会、吉宗さんなら労働会」とうたった。クニはこの「労働会」のカアちゃんとして活躍する人になった。

自らの闘い

わが国の健康保険法は昭和二年一月一日から実施に移されている。これにともなう磐城炭鉱株式会社健康保険組合の、審議委員の選挙戦は、前年、つまり「坑夫組合」と「磐炭会」が結成された年の十二月から始まった。吉宗の飯場は、十四畳の帳場と、十畳二つ、八畳三つを「健康保険選、小野田坑労働者大演説会」の会場にあてた。吉宗は健康保険法の正体をつぶさにあばき、「諸君！ このたびの選挙はきわめて重要である。それは政治に対してはもちもん、自己の生活について

も、一切の発言の権利を封じられていた労働者が、はじめて労働者の真の代表を選ぶ機会を、この手につかんだことである。われわれは今こそ、資本の収奪の実態をあばき、積み積った怒りを選挙戦に発揮しようではないか!!」と呼びかけた。満堂に拍手が鳴りやまなかった。一つ、保険料は全額会社側が負担すべきこと。二つ、在来の共済会年金の積立金を即時、全坑夫に分配すべきこと。三つ、保険組合の議員および理事は、すべて被保険者より選出すべきこと。四つ、保険手当の給付額を増加すべきこと。五つ、給付期間の制限を撤廃すべきこと。以上の要求が読み上げられるたびに拍手と賛成の声が起きた。クニも盛んに拍手し「賛成!!」と叫んだ。

小野田坑は一選挙区となり、定員二名に対し、坑夫組合は吉宗を、会社側は渡辺某を立候補させ、中立一名をふくめ三名の争いになった。山代飯場に結集した青年会や婦人会は、各カマドを風つぶしに歩いて山代支持を訴えた。会社の係員や磐炭会の会員は、そのあとを追いかけて、「投票場の天井裏には、前日から役員がかくれていて、誰の名を書くか見ている」とか「山代に投票したものは会社が首にするかも知れぬ」などと、もみ消しと

脅迫に懸命になった。正月のはじめ選挙の日が来た。日本の労働者階級の歴史が始まって以来最初の、全くの普通選挙である。投票権は、男女の区別も年齢の区別もなく、十三歳の選炭係の少女も一票を持ち、朝早くから投票に出かけ、投票がすんでも投票所のぐるりを去らなかつた。開票が始まると勝利の予感が若者の中を流れ、請願調査は「結果が発表されても騒いではならんぞ!!」といつて歩く。開票所の中から立会人が飛び出して来て、「山代は最高点だ!!」と叫ぶ。「万歳!!」の絶叫があがり、坑夫の歌「二十世紀の文明を、飾る銅鉄石炭は、これ工場に地の底に、われらが流す汗なるぞ!!」が、小野田の山々をどよもした。クニは若者といっしょに歌いかつ乱舞した。

開票三日後、会社は吉宗を蹴首して、山代組の労働者の家をまわって鑑札の書きかえをせまり、「山代と関係者を切れ」と強制した。労働者は一月十六日、山代飯場を会場に「小野田炭鉱全山労働者大会」を開いて、山代敵首反対の狼火をあげた。このとき突然二十名あまりの暴漢が会場に乱入した。クニは躍り上って「何をするんだこの馬鹿もん! 磐炭会の犬どもはトットと帰れ、労働会を甘く見

るな」と、満場をひきいる勢いで暴力団に立ち向った。こうして争議は始まり、クニはその中心的活動者になった。

争議は破れ、山代飯場の立退きが強制執行されたのは、この年の八月なかばの深夜であるが、このときもクニは吉宗よりも激しく、「人様の家の敷居を、許しも得ないでまたぐのは犯罪だぞ」と、警官の一隊とわたりあっている。山を追われた吉宗は、水の谷というところの国道ぞいのちいさな家に移ったが、怒りに燃えるクニは、磐城炭鉱の社長浅野総一郎が、湯本温泉の旅館に泊っていると聞くと、「社長に会わせろ! 談判したい」とどなりこみ、労務課長が懇請してお引取り願う一幕も演じた。社長と談判できない彼女は、湯本で一番人の集る十字路に立って、「おれはな、たったいま磐炭の労務課長の野郎にお引取り願われたが、浅野総一郎はどうして大資本家になったか」と、自分が見聞きしている飯場制度の暴利をあげいた。人々は黒山のように彼女を取り巻いた。彼女は資本家に使われる暴力団と警察のやり方をも、まるで米袋の端がほころびたように、あばきたて三時間以上も人々を引きつけていた。それは吉宗の演説よりはるかに大衆の人気を得

た。

昭和四年四月十六日、世にいう「四・一六」の大検挙によって、吉宗は茨城県で検挙された。四・一六の、前橋、横浜、千葉、静岡、茨城の、五地方の被告に対する統一公判が東京控訴院ではじまったのは昭和五年一月八日で、このときの裁判の進行状況は雑誌『戦旗』の、昭和五年十一月号に掲載された貴司山治氏のルポルタージュ『波』に、生き生きと描かれているが、傍聴席にいたる丸髷のばあさんクニの活躍はめざましい。公判闘争の彼女は『波』のほか、府下の多くの新聞に「……クニは法廷で騒ぎ、革命歌を高唱して日比谷署に検挙された」と報道されている。

公判後、クニは水の谷の家に帰るが、再建活動をする人々を助け、昭和六年にも七年にも平署に検挙され、ひどい拷問を受けたが彼女はこれにこりなかった。

体刑を受けた吉宗は、まる四年を秋田刑務所の独房ですごし、出獄後は京浜に出て、昭和十二年には筆者私と結婚。十五年五月再び検挙され、二十年一月広島刑務所に獄死した。この間クニは息子の思想が悪いと思ったことは一度もない。シンガポールが陥落したころ、家の近くのタバコ屋の店先で、「こん

どの戦争は金儲けのインチキ戦争だから、敗けるにきまっている。むかし戊辰の役のとき、おらの母親は十三歳で、一日五里の道をなん日も歩いて逃げた。そのときも雨が多かつたそうだ。雨の多いときの戦争は負けいくさだ」と、大声でしゃべり、巡査から「ばあさんよ、そんなことをいうとおれの責任になる。お願いだからやめてくれ」と、手を合わされたがやめないのので、平拘置所の未決監に一月拘留された。

敗戦の年の暮、湯本の磐炭会館で、戦後はじめての労働者の大集会が開かれたとき、クニは壇上から一時間余も、「磐炭の財産は、稼ぎ人が働いたから出来たものだ。それをインチキ戦争にぶちまけて国を壊敗させたのは、資本家野郎の責任だ!!」と、男の弁士が顔まけの大演説をやって、拍手喝采を受けている。常磐の労働階級は、吉宗の追悼会を、五年祭、十年祭、十六年祭、二十年祭と、四度も開いているが、その度にクニは式に臨み、今日の若者を激励する言葉を述べている。

昭和四十一年七月、八五歳で永眠するまで、クニが好んで話す言葉は、磐炭争議とその前後の闘いのことであつた。彼女の闘いは最後まで一貫して自らのものであつたのだ。